

日本顕微鏡歯科学会第18回学術大会・総会 事後報告

令和4年4月22日(金)・23日(土)・24日(日)の3日間にわたり、一橋大学一橋講堂にて日本顕微鏡歯科学会第18回学術大会・総会が開催されました。《口腔の健康から始まる全身の健康》顕微鏡を応用した精密歯科治療は口腔の健康を守り全身の健康につながると題し、大会長の小林 平先生（日本大学松戸歯学部）のもとコロナ禍の影響で本学会として初めてのハイブリッド開催でしたが、懇親会やランチョンセミナー等を含め、大きなトラブルもなく正会員513名、準会員207名、非会員37名、学生5名、計762名と多くのご参加をいただき盛会裡に終了することができました。全ては、関係各位の温かいご支援、ご協力の賜と感謝申し上げます。



【1日目】4/22(金)

3年ぶりの対面での認定医・認定衛生士筆記試験と口頭試問を実施いたしました。三橋 純認定審査副委員長の指揮のもと試験委員の先生方が総出で、試験会場の設営を行いました。コロナ禍での開催のため、パーテーションを各机に設置して面接試験を行うよう設定しました。



初日は、日本顕微鏡歯科学会認定医・認定衛生士試験・認定審議会・理事会と併行し、企業展示およびランチョンセミナー会場となる中会議場を手始めとして学会会場の設営準備も進められました。かなり大幅な机や椅子の移動を要しましたが、実行委員の皆様の迅速な行動力のおかげで、予想よりもはるかに短時間で会場の設営を完了することができました。

午前中に企業展示ブースの大枠を設営し、午後から電気関係の設営や、マイクروسコープなどの搬入を開始しました。午後は1階ロビーでの受付回りの設営、2階一橋講堂の設営および予演・試写を行いました。



ウェルカムパーティー

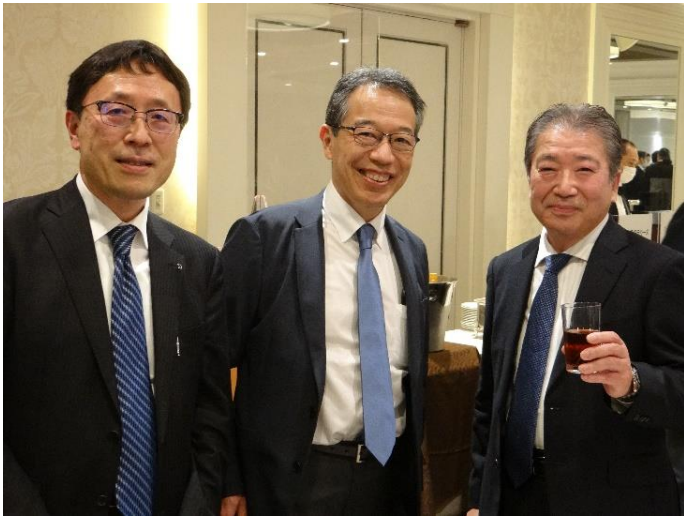
夜は東京歯材社提供によるウェルカムパーティーが開催されました。シンポジストの先生方や学会代議員の先生方をご招待して和やかな中にも学術的な話題が多い懇親会となりました。東京歯材社からは、将来のマイクロとして期待されている3Dマイクロの展示がありました。数千万円とのことで、今后台数が多く売れることが価格の抑制に働くとのことでした。



東京歯材社の吉田社長の開会あいさつ。コロナ禍での数年ぶりのレセプションで熱い語りを頂戴いたしました。



シンポジストの内藤先生にもご参加いただき話も盛り上がっていました



3年ぶりのレセプションで話も弾みました



3Dマイクロを楽しむ前会長の三橋 純先生
これからの主流になるのでしょうか？



学内の実行員も準備が終了して最後に合流しました

【2日目】4/23(土)



北村 和夫先生



内堀 聡史先生

実行委員長の内堀 聡史先生（日本大学松戸歯学部）、学会長の北村 和夫先生（日本歯科大学付属病院）の開会挨拶に続き、大会長の小林 平先生の基調講演から始まりました。



小林 平大会長による基調講演



最初の一般口演の座長は鈴木 真名先生と三橋 晃先生です。安定感のあるお二人の進行によりスムーズにかつ学術的な口演が始まりました。



一般口演のトップバッターは、白井敏彦先生の第2大臼歯部に発症した歯根嚢胞に対し意図的歯牙再植にて対応した2症例でした。根管治療で軽快しない根尖性歯周炎に対して、顕微鏡が外科的歯内療法においても有用であることが分かるご講演でした。



野亀慶訓先生による『IOSによる縁下マージンの印象に顕微鏡が役立つ一症例』では、従来IOSの弱点とされる歯肉縁下マージンにおいて、顕微鏡を使用し拡大視野下で1つ1つの治療を精密に行うことで治療精度が格段に向上し、結果としてIOSを用いた精度の高い印象採得が可能となった症例を御供覧頂いた。野亀先生の日々の臨床がいかに丁寧に行われているかが垣間見られるご発表であるとともに、今後ますます大きなシェアとなるであろうIOSをいかに活用してゆくか大いに参考となるご発表でした。



志田 健太郎先生『歯科治療を可視化するためのマイクロスコープの有用性』では歯科医師・歯科衛生士・患者がコミュニケーションツールとしてマイクロスコープの映像を共有することで、三方良しの環境を構築できる実際例をご提示いただきました。

それに伴う歯科衛生士教育や複数台マイクロスコープの整備などについても言及された、実際の臨床現場ならではのご発表でした。



辻 将先生の『手術用顕微鏡を用いた上顎前歯における唇側管外側枝の処置』では外科的歯内療法の予後不良の原因の一つとなる側枝に着目し、コンビームCTとマイクロスコープを併用することで3次元的位置関係の観察が可能となり、結果として側枝による患歯の不快症状を改善することが出来たという症例を御供覧いただきました。

近年のコンビームCTとマイクロスコープの併用活用の有効性を分かりやすく示して下さいましたご発表でした。



活発な質問もあり、ドーベルマンと噂のある福岡県開業の元大会長賞受賞辻本真規先生の鋭い質問もありました。



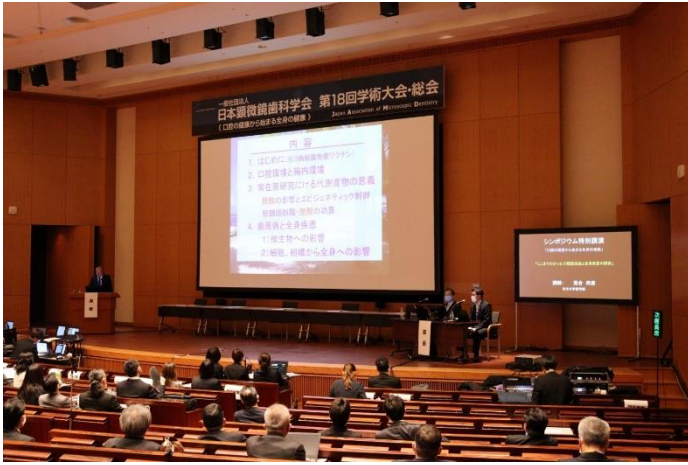
シンポジストには京都府立医科大学の内藤先生をトップバッターにお招きして、口腔の健康からつながる全身の健康の腸内細菌についての講演をいただきました



シンポジウム特別講演 I の演題は「腸内細菌叢と生物学的年齢」(Gut microbiota and biological age)



座長の辻本 恭久先生、北村 和夫先生



2番目のシンポジストは日本大学歯学部落合 邦康先生『ここまでわかった口腔感染症と全身疾患の関係』



歯科的には大きなテーマでしたが興味あるシンポジウムになったと思います。感謝状の贈呈。左から辻本 恭久先生、落合 邦康先生、内藤 裕二先生、北村 和夫先生、小林平先生。



シンポジウム後半は東北の雄、佐藤 貴彦先生の講演から始まりました。



梅村 匠先生は上顎洞底挙上術におけるMIを追及するとの演題で、顕微鏡のインプラント外科手術への応用に関してわかりやすく講演いただきました。



武市 収先生はヘルペスウイルスによる根尖性歯周炎発症とマイクロエンドと題して基礎的ウイルス学とマイクロエンドを結び付けた講演をされました。



シンポジウム第3部は衛生士の視点より増田佳子先生から、生涯を通しての歯科(検)健診と題して講演をいただきました。今回の学術大会では、衛生士の先生方の講演を同じ会場で聞いていただき、一つのシンポジウムを行うことが初めての試みでした。増田先生にはそのトップバッターとして素晴らしいご講演をいただきました。



林 智恵子先生は全身の健康をマイクロを使って口腔内観察することで、変化を体感することができるという内容の発表をされました。



シンポジウム後の総合討論の様子。歯科医師と歯科衛生士が一つのテーブルで討論を行うというシンポジウムがかつてあったのでしょうか？これこそがこの学術大会の意義と考えています。



『口腔の健康から始まる全身の健康』座長・シンポジストの先生方への感謝状贈呈。
テーマが非常に大きかったのですが、従来の顕微鏡が非常に狭小な視野での診療という枠組みを打破した新しい顕微鏡歯科の形を提案できたように思います。

感謝状の贈呈。左から三橋 純先生、増田佳子先生、林 智恵子先生、武市 収先生、梅村 匠先生、佐藤貴彦先生、小林 平先生。



2日間アナウンスを担当していただきありがとうございます。大会がスムーズに進行できたのも神田先生達のおかげです。



企業の展示も難しい状況の中30社以上のご協力をいただきました。参加者にも久しぶりの企業展示を楽しんでいただけたようです。



懇親会



如水会館での懇親会です。コロナ禍で数年間開催できていなかった懇親会を行うことができました。学術大会の後の意見交換にはやはり対面で会が必須ですね。



懇親会を準備してくれた水川理事の乾杯の音頭で3年ぶりの懇親会が始まりました。



今日、明日のシンポジストそろい踏みです。表情の違いが一目瞭然でした。

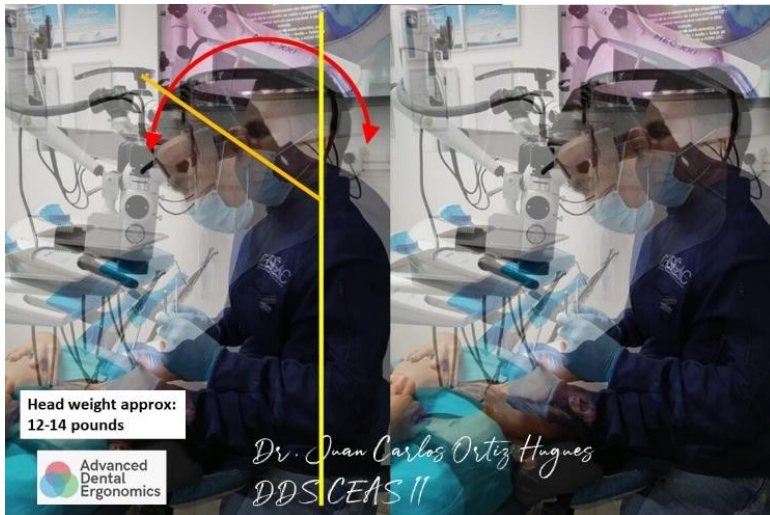


三遊亭楽生さんの寄席をみんなで楽しみました。

【3日目】4/24(日)



トップバッターは、昨年度大会長賞受賞の表 茂稔先生です。



AMED口演はバイスプレジデントの Dr. Juan Carlos Ortiz Hugues からのビデオレクチャーです。昨年も来日を希望されていましたが日本に来ることができず、今年もまた・・・来年こそは福島で会いたいですね。

DENTAL ERGONOMICS/ MICROSCOPE DENTISTRY DENTAL ERGONOMICS



OPは土曜日4題、日曜日7題。

顕微鏡歯科学会の取り組みとしてサマーセミナーやウィンターセミナーで症例発表等の基礎作りをサポートし続けていることもあり、若手の先生方による優れたご発表が今大会でも多く出題されました。

顕微鏡歯科学会を通して師弟関係が生まれたケースもあり、若手の発表を支えるベテラン陣のサポートが随所に感じられ、顕微鏡歯科学会の良さも感じる事ができました。

ご発表者の顔ぶれにも拡がりが見られ、今後のご活躍が非常に楽しみです。



関口寛人先生『歯根破折のリスクを低減するダイレクトクラウン修復を行った一症例』では、いかにマイクロスコープを使用して精密な根管治療を行ったとしても、その上部構造を作製する際に残存歯質に問題があり結果的に良好な予後を得られないことが多いことについて触れ、フェルールの獲得が難しい症例でもコンポジットレジンを用いて『ダイレクトクラウン修復』を行うことで歯根破折のリスクを軽減できるのではないかとご提案を含めての症例を供覧して頂きました。





多くのセッションに対し会場から質問があり、顕微鏡歯科学会らしい活発な質疑応答の時間となりました。
ハイブリッド開催ということで、会場とオンライン両方から質問がありましたが、座長の先生方はバランスよく自然な流れで進行してくださっていました。



台湾は時差がほぼないため、Zoomで接続して3人の先生から講演をいただきました。
台湾のDr. Bj Chen、日本の林 文晷先生、座長と取りまとめをありがとうございました。

TS1 : Dr. Yu-Cho Liu (Endodontics)
“Ledge management - step by step”

TS2 : Dr. Sung-Hui Wang (Periodontics)
“Management of soft tissue wall technique - what we could do better under microscope?”

TS3 : Dr. Wei-Hsuan Lee (Prosthodontics)
“Biomimetic direct composite veneers”



ランチョンセミナーでは、午前中の発表が伸びたために澤田先生が思いっきり巻きながらも適切なセミナーを担当していただきました。澤田先生ご迷惑をおかけいたしました。



3日目午後の衛生士シンポジウムは、従来は別会場で行われていたものを今回は一橋講堂で行い、歯科衛生士と歯科医師が共有する形での開催としました。

座長であり、今大会副大会長の櫻井 善明先生の和やかな進行の下、黒川 綾先生、高橋 規子先生、小宮 純子先生の素晴らしいご講演を拝聴することができました。



高橋 規子先生は直前でのコロナ感染により急遽会場参加を断念することとなりましたが、ご発表部分については前日深夜に録画して動画を流し、発表前後はLIVEでの参加。服装や髪型まで動画とLIVEを合わせる入念さだったので、録画ということに気づかない方がほとんどでした。高熱で声が出ない中のZoomでのご発表ありがとうございました。



歯科衛生士から歯科医師への今後どのようなことを希望するかという会場からの質問に、「挨拶をしてほしい」「ありがとうと言ってほしい」というお答えを頂きました。

顕微鏡歯科という、よりクオリティの高い診療を追求する医療人として、まずは本学会から当たり前のことを当たり前出来る人であらねばならないと背筋の伸びる思いでした。

ポスター発表も10演題いただき、討論も活発に行われました。いつの日かマスクなしに討論が可能になることが来る日を願っています。



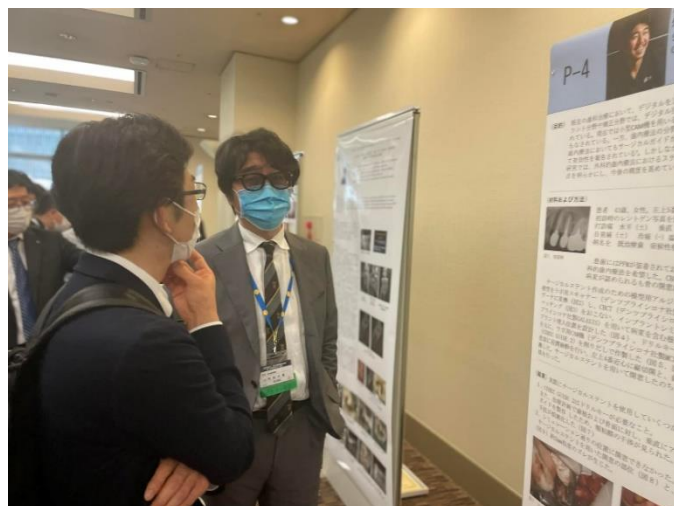
PP-1：笠原明人先生、高田光彦先生



PP-2：高田光彦先生、高橋規子先生、笠原明人先生



PP-3：北村和夫先生、大橋卓也先生、黒田恭平先生、木幡 雅先生、岡本祐幸先生、濱田康弘先生



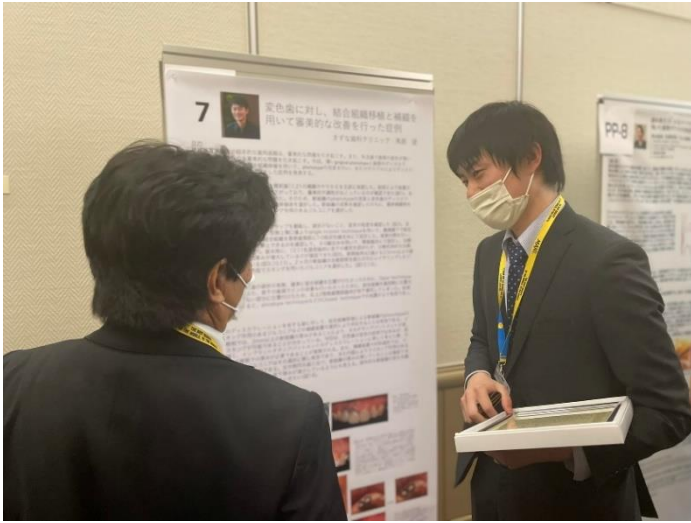
PP-4：中山大蔵先生



PP-5：中野忠彦先生



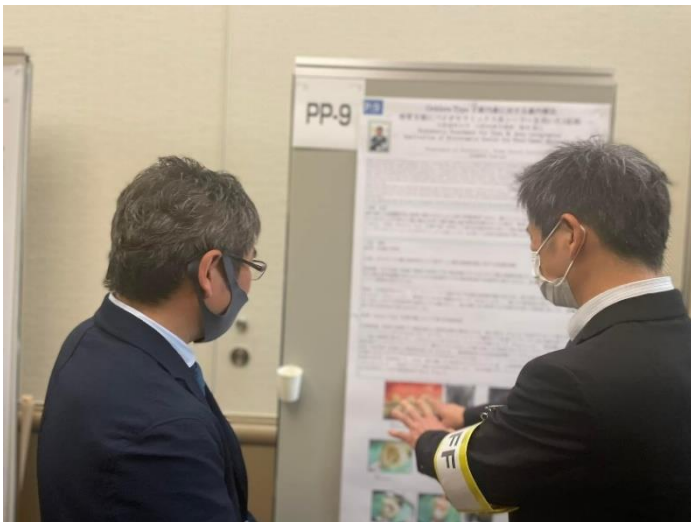
PP-6：坂本貞樹先生



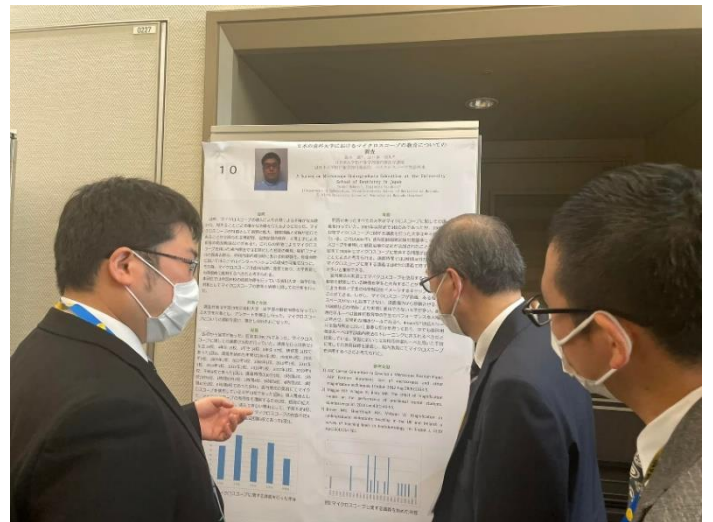
PP-7：馬庭 望先生



PP-8：清水直美先生、松尾佳奈先生、稲吉孝介先生、
松田敦至先生、川上紗映先生、中川寛一先生



PP-9：稲本雄之先生



PP-10：鈴木 誠先生、辻本恭久先生

今回残念だった点は、台湾セッションの先生方がコロナ禍により来日が叶わず、オンラインLIVEでのご発表となったことです。
時間の兼ね合いでポスターセッションと同時進行となり、両方を聴きたい参加者の皆様に気ぜわしい思いとなりました。



ブックフェアの様子。三橋 純先生による書籍の紹介。



ブックフェアの様子。北村 和夫先生による書籍の紹介。

顕微鏡歯科学会ご参加の先生方はご自身の著書や共著を執筆していらっしゃる方が多いこともあり、今回はブックフェアの時間を設けました。それぞれの著書について順々に一言ずつコメントを頂きましたが、スター選手が一堂に会している様子は壮観でした。会場内では気になっていてもお声がけできない著名な先生方でも、ブックフェアを機に直接お話出来たりしたようです。最終日午後ということで、交通機関の都合で帰路についている参加者も多く、せっかくのブックフェアなので、今後は時間帯を見直すのも良いかもしれません。



次回大会長の高橋 慶壮先生のあいさつ。

櫻井 善明副大会長の閉会のあいさつ。



実行委員会は社会情勢からZoomでの開催となりました。毎月1回は開催する形で実行委員が意見を交換して学会の準備を行いました。結局学会当日まで皆が顔を合わせることはできませんでしたが、何回も会議をする中でお互いのことはよく理解をすることができました。実行委員の先生方、お忙しいところ1年間本当にありがとうございました。